



## 「DynaMed」と「MEDLINE with Full Text」および 電子ジャーナル導入とILL件数の変化

椎木 淳美

### I. はじめに

当院での「DynaMed+MEDLINE with Full Text」のセットと電子ジャーナルの導入のきっかけ、導入に伴い行ったことの報告と、それによりILL件数にどのような変化があったかを調べた結果をまとめた。

### II. 導入のきっかけ

#### 1. 「DynaMed+MEDLINE with Full Text」導入のきっかけ

「DynaMed」導入のきっかけは「UpToDate」の価格高騰により購入が不可能となってしまったためだ。購入不可能の通達を管理側より受けた際「『UpToDate』以外のEBMツールを導入したいので何かないか」と言われ、「DynaMed+MEDLINE with Full Text」のコンソーシアム価格の資料が手元にあったため、提案した。

その他に、当院では「UpToDate」のDVD版を利用していたが、利用者より「利用しづらい」という声が多かったこともあげられる。

#### 2. 電子ジャーナル導入のきっかけ

電子ジャーナル導入のきっかけは「online first」の論文が閲覧できない、何とかならないのか「電子ジャーナルにしてほしい」などの声があったことだ。近年onlineのみの雑誌も増加しており、例年通りの冊子体のみの購読では対応しきれなくなっていた。そのため、電子ジャーナルへの移行を考えていた時に管理部門より経

費削減の通達があった。経費削減は購読誌を減らすことでしか達成することはできないが、今回は数誌の購読を中止し、洋雑誌のほとんどを電子ジャーナルに移行することで削減可能だった。このことが洋雑誌の電子ジャーナル導入への後押しとなったのは幸いであった。

### III. 導入までに行ったこと

#### 1. 「DynaMed+MEDLINE with Full Text」導入までに行ったこと

「DynaMed+MEDLINE with Full Text」正式導入までにまずトライアルを実施した。周知は「図書室のお知らせ」に掲載という方法で行った。

また図書室をよく利用される方向けに、図書室入口の掲示板にトライアル中である旨のポスターを掲示した。

「UpToDate」はすでに利用不可になっていたため、「UpToDate」が使えない、という問い合わせの際にも「UpToDate」は利用できない旨と、「DynaMed+MEDLINE with Full Text」のトライアルの件を伝えた。

#### 2. 電子ジャーナル導入までに行ったこと

当院では、毎年年間購読誌アンケートを実施している。そこで、今回は文面に電子ジャーナルへ移行する可能性があることを記載し、アンケートを実施した。実施終了後、アンケート結果をまとめ、年間購読雑誌の購読形態を各部長にリストで配布し、確認を行った。この時点で「やはり冊子体のままで」という回答があり、確認してよかったと感じた。最終確認終了後発注をお願いした。

しかし、発注後に「来年は冊子体が良い」と言われた科があった。これには「経費削減」や「online first」の文献の増加があり、「冊子体に戻すのは難しい」と返答した。

#### IV. 導入後に行ったこと

##### 1. 「DynaMed+MEDLINE with Full Text」導入後に行ったこと

まず「DynaMed+MEDLINE with Full Text」正式導入の周知をトライアル時と同じく「図書室のお知らせ」に掲載することで告知した。また、図書室入口の掲示板にもポスターを掲示した。

次に「DynaMed+MEDLINE with Full Text」の説明会を開催した。開催の周知は「開催のお知らせ」を各部署と部長へは配布し、更衣室やエレベーター横など、職員がよく利用する場所にはポスターを掲示した。

部長へのお知らせには各部ごとの参加申込書を添付し、参加希望者名を記入した申込書を図書室へ提出していただいた。

説明会の開始時間は業務終了後の参加しやすい時間をということで、17:30からの1時間程度とした。会場は図書室の会議スペースを利用した。

計3回の説明会を実施したが、急な日程にもかかわらず、初日と二日目は20人～30人、最終日は当初予定していた日に参加できず急遽参加された方もいらっしゃったため、40人以上と多数の方が参加され、説明会の講師を務めてくださった方もかなり驚かされていた。

説明会の開催後、実際利用された方が「私はDynaMedの方が使いやすいわ」「全文見られるのが増えて便利、他の先生にも言っといたよ」などの声をかけてくださり、開催してよかったと感じた。

##### 2. 電子ジャーナル導入後に行ったこと

毎年配布している年間購読雑誌の一覧を購読形態別に変更し配布した。当院図書室にはホームページがないため、PDFファイルでリンク付

のリストを作成し、各医局・各部署のインターネット利用可能端末に保存した。

その上で図書室の職員用ホームページが作成できないか上司に相談したが、許可を得られず断念せざるをえなかった。

#### V. 導入前後の文献複写申込件数の比較

「DynaMed+MEDLINE with Full Text」および電子ジャーナル導入前後の図書室への文献複写申込件数を対応別に調べ、比較した。

導入前の2012年度は、ILL依頼件数が1,075件、自館複写が972件、合計2,287件だったのに対し、導入後の2013年度は、ILL依頼件数が950件、自館複写が772件、合計1,730件と全体的に減っていることがわかった(表1、2)。

表1 2012年度文献複写申込件数(対応別)

	件数
ILL依頼	1,075件
自館複写	972件
合計	2,287件

表2 2013年度文献複写申込件数(対応別)

	件数
ILL依頼	950件
自館複写	772件
合計	1,730件

グラフにして比べてみると、自館複写とILL依頼件数の比率はほぼ半々ということが見て取れる(図1、2)。

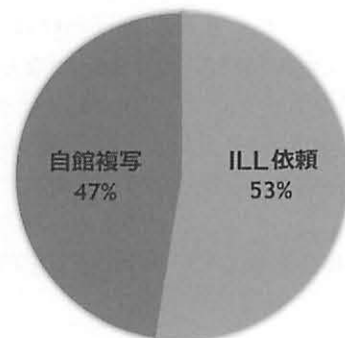


図1 2012年度文献複写申込件数比率(対応別)

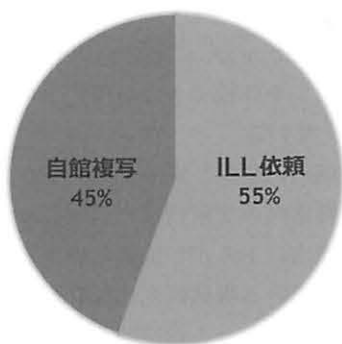


図2 2013 年度文献複写申込件数比率 (対応別)

自館複写を含めた全体の件数が減少しているのは、「DynaMed+MEDLINE with Full Text」および電子ジャーナルが利用されている結果だと感じている。

#### VI. 導入前後の ILL 依頼件数の比較

「DynaMed+MEDLINE with Full Text」および電子ジャーナル導入前後の ILL 依頼件数を機関別に調べ、比較した。

導入前の 2012 年度の依頼先は、近畿病院図書室協議会（以下近病図協）加入機関が 455 件、大学図書館が 462 件、文献手配業者が 142 件、その他が 16 件だったが、導入後の 2013 年度は、近病図協加入機関が 384 件、大学図書館が 455 件、文献手配業者が 103 件、その他が 8 件という結果になった（表 3、4）。

表 3 2012 年度文献複写依頼件数 (機関別)

	件数
近病図協	455 件
大学図書館	462 件
文献手配業者	142 件
その他	16 件

表 4 2013 年度文献複写依頼件数 (機関別)

	件数
近病図協	384 件
大学図書館	455 件
文献手配業者	103 件
その他	8 件

「DynaMed+MEDLINE with Full Text」および電子ジャーナルを導入した結果なのかは不明だが、2013 年度は文献手配業者に依頼している件数が大幅に減少している。しかし、大学図書館へ依頼している比率には大きな変化は見られなかった。

こちらもグラフにして比較した結果、全体の件数こそ減少しているが、比率としてみるとほとんど変化が見られないということがわかった（図 3、4）。

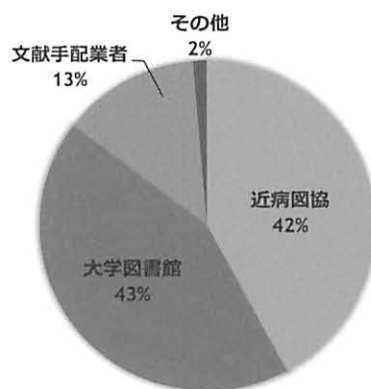


図 3 2012 年度文献複写依頼件数比率 (機関別)

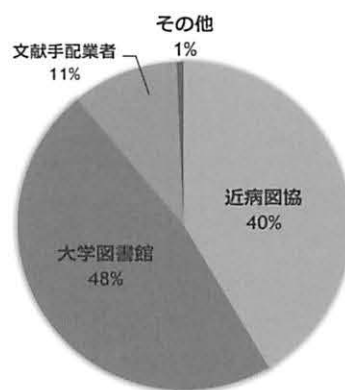


図 4 2013 年度文献複写依頼件数比率 (機関別)

#### VII. 結果

「DynaMed+MEDLINE with Full Text」および電子ジャーナルを導入したことによって、文献複写の申込件数は全体的に減少し、他機関へ

の ILL 依頼件数も減少しているということがわかった。

しかし、件数自体は減っていても、図書室への文献複写の申し込みが無くなることはなく、その依頼先を比率で見るとほとんど変化がないということ、そして依頼先のほぼ半数が大学図書館だという現状にも変化がないということがわかった。

#### VIII. 終わりに

当院での電子ジャーナル導入は 2014 年にほぼ終了し、一部希望の雑誌以外はすべて電子ジャーナルに移行された。依然図書室のホーム

ページがないため、PDF ファイルのリストを配布している。しかし、これからも機会があればホームページを作成できないか、上司に相談しようと考えている。

件数を調べた結果、電子ジャーナルの導入によって図書室への文献複写申込件数は全体としては減少傾向にあるが、依頼先の半数が大学図書館となっている現状に変化はないということが明らかになった。これに関しては、これからもおそらく変わることはないと考えられる。このことから、ILL 依頼先の機関に感謝し、マナーに気を付け、よりよい ILL が行えるよう心掛けていきたいと改めて感じた。